

仮象とアンチ仮象：ラッヘンマンの作曲によせて

高安 啓介

この論文では、ドイツの作曲家ヘルムート・ラッヘンマンの音楽を検討することにより、音楽におのずとそなわる、まやかしとしての性格、ドイツ語でいう仮象 *Schein* としての性格にたいして、作曲家がいかなる態度をとりうるかについて考える。そこで強調されるべきは、ラッヘンマンの音楽において、アドルノがかつて美学理論でしめしたモデルが、アドルノも思いもよらなかったようなしかたで展開されていることである。このことはとくに「楽器による具体音楽」というラッヘンマンの考えによくあらわれている。この「楽器による具体音楽」とは、特種奏法によって、楽器のなじみの音を異化することに基づくものである。そこでまず、この考えを具体化しているいくつかのソロ作品を検討する。そして次に、クラリネットとチェロとピアノのための《アレグロ・ソステヌート》1987/88 を取り上げる。なぜなら、ラッヘンマンのこの室内楽作品では、それまでの実験的取り組みがたくみに統合されているからである。その統合のされかたは、彼のきわめて複雑なオーケストラ作品よりもはっきり分かる。《アレグロ・ソステヌート》の分析ではとくに、噪音や沈黙がどのように扱われているかを明らかにするなかで、構造面での入念な作りとともに、その破綻というべきところが記述されることになる。ただし、ここで破綻といっても、それは仮象における幻想破壊の要素として、むしろ肯定的に評価されるべきものである。さらに特筆すべきは、とくにこの美学上の葛藤のなかで、ラッヘンマンの音楽はそれ自体、私たちの時代の問題にたいする洞察を含んでいることである。